

氏名	王 桂蘭
学位	博士
専門分野の名称	文化科学
学位授与番号	博甲第 4659 号
学位授与の日付	平成 24 年 9 月 27 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	中国内モンゴルにおける生業変化に伴う文化変容
学位論文審査委員	主査・教授 北村 光二 教授 中谷 文美 教授 藤井 和佐 准教授 高谷 幸

### 学位論文内容の要旨

本論文は、中国内モンゴル自治区に暮らすモンゴル牧畜民が現在経験しつつある大きな変化の全体像を、「生業変化」とそれに伴う「文化変容」という観点から記述・分析することによって、それを、この時代のこの地域に独特の自然的、歴史的、政治経済的条件に何とか適応しようとする人々の営為が作り出す「新しい地域文化」の創出として理解する可能性を探る試みである。

そのような構想の下で、本論文は大きく、第一部「生業変化」と第三部「文化変容」の二つの部分に分けられ、それを繋ぐものとして第二部「市場経済化と生態移民」が位置づけられている。「生業」を基本において「文化」を論じようとする構図は、本論文が拠って立つ生態人類学の立場に由来するものであるとともに、この地域においてモンゴル民族がその生存の基盤としてあらかじめ引き受けてしまった基本的前提に対応するものだといえる。序章における先行研究の検討において詳しく述べられているように、牧畜という生業がもともと、農耕が不可能な、あるいは、不十分にしか行えない乾燥地帯の自然条件に適応するものとして工夫された生き方であり、中国大陸においても、牧畜民族は、より内陸に広がる乾燥地帯にその生活の基盤を維持してきた。モンゴル民族も、農耕民である漢民族の統一国家に対峙する形で、その北に広がる乾燥した高原地帯に生活の根拠を構えてきたのである。

したがって、「生業変化」のもっとも基本的な部分は、長い歴史的背景を持つ、南に広がる農耕民国家との拮抗的な関係にもとづく農耕化への圧力ということになる。とくに、清朝以降は、国家的な開墾政策のもとで、漢人の移民の流入と草原の耕地化が拡大し、牧畜から農耕への生業転換も進んだ。新中国成立後は、国家的政策の転換に大きな影響を受けることになるが、社会主義的集団化政策のもとでは、曲がりなりにも牧畜的生業形態は維

持された。しかし、その後の改革開放路線への転換後、とくに放牧地の個人請負制の開始によって、耕作地の拡大が一気に進み、市場経済化の進展とともに、人々の生活のあり方はまったく新しい段階に入ることになった。

これらの農業開発の推進によって、内モンゴル地域にもたらされた影響として特筆すべき点は以下の3点である。まず第1には、漢人の移民の流入によるこの地域の人口の増大と民族構成における漢民族の比率の増大がもたらされ、それが、地域内のモンゴル人のより辺境域への移住を促すことになった。その影響の第2のものは、生態環境の悪化である。内モンゴル地域は生態環境的に農耕に適さない。そのような地域で農耕化が進められることによって、草原の砂漠化や退化がもたらされることになる。近年は、この環境の悪化は中国政府の注目するところともなり、さまざまな生態保全の政策の実施にも結びつくことになっている。

そして、農業開発の推進がもたらした影響の第3点は、生業変化そのものとしての「半牧半農」という生業形態への移行と、牧畜の定着化の進行である。それは、内モンゴルにおける牧畜システムそれ自体の大きな変化に結びつくものになる。モンゴルの伝統的牧畜は、季節的に宿営地を移動する遊牧と呼ばれる方式で営まれ、複数の家畜の種類を組み合わせることを前提に、それぞれの家畜の食性と水や草の分布状態を考慮した牧畜経営がなされてきた。しかし、農耕化の進展と土地の個人所有化政策の導入によって、農耕との適合性が低い家畜種が淘汰され、さらに、個人単位に分割された放牧地における飼養頭数の制限のもとで、経済的に有利なカシミヤヤギの畜舎飼養に特化するという状況に追い込まれることになる。

このような生業変化の行き着く先に大きな影響を与えたものは、中国における改革開放路線への転換に伴って実施された生産の個人請負制や土地利用の個人請負制である。それらの進行に伴って私的な利益の確保を最優先する傾向が拡大し、本格的な市場経済体制下へと進み出ることになったと考えられる。それとともに、この大きな変化に影響を与えて問題を複雑にしているものとして、政府による環境保全政策の衣をまとった産業振興政策の影響である。これによって、内モンゴルの伝統的牧畜村は、産業化した牧畜業の担い手である全国的な企業に原料を提供する産地となり、その一方で、そのような企業に労働力を提供する小都市化への道を歩み始めることになっている。

これらの生業変化とその後の市場経済化への変化が、本来の姿とはまったく別のものへの転換という様相を示しているのに対して、第三部で取り上げられる「文化変容」は異なる置づけを与えられるべきものになっている。伝統食の文化にしる、人名、地名に見るモンゴル語の文化にしる、オボーという民族的祭祀・祭礼の文化にしる、そのそれぞれは生業変化にもとづく生活様式の変化や国家的政策の影響を受け、大きな変化を被ってきたことは確かである。しかし、産業化して市場経済化した近代的な生活において、それらに具わっていた伝統的な要素は、過去のものとして忘れ去られるのではなく、民族的同一性や一体性を支える基本的なものとして、新たな装いのもとで、むしろ、より人々の関心を集

めるものとして再生しているかのようなのである。

中国という国家が、社会主義的集団化の時期と文化大革命と呼ばれる混迷の時期をくぐり抜けて、産業化と市場経済化を果たした先には、非政治的な領域にとどまるという限定付きとはいえ、支配層としての漢民族と被支配層としてのモンゴル民族という関係に縛られることなく、民族的なものを素直に表明できる状況がもたらされているかのようなのである。そして、この状況において、生業としての牧畜に基盤をおく「牧畜的なもの」がその民族的同一性の核となり、「新しい地域文化」とでも呼ぶべきものが姿を現わしはじめていると考えるべきなのかもしれない。

### 学位論文審査結果の要旨

本論文は、中国内モンゴル自治区に暮らすモンゴル牧畜民が現在経験しつつある巨大な変化の全体像を、「生業変化」とそれに伴う「文化変容」という観点から記述・分析しようとする試みである。そのような試みに取り組むうえでの本論文の特徴は、文化人類学的研究の基本である、フィールドワークによる現地調査とそれにもとづくミクロな視点からの民族誌的研究を行いつつ、それと組み合わせる形で、マクロな政治経済史を視野に収めるさまざまな分野の研究を渉猟し、整理することに多くの労力を注いでいる点にある。

ミクロな現地調査に基づく研究は、この研究の導入部に当たる第一部第一章「牧民の生活とその変化」と第三部「生業変化に伴う文化変容」の各章の記述に活かされている。とくに第三部の文化変容に関わる各章の記述に関しては、ネイティブとしてこの現実を身をもって体験したという強みが活かされており、一方で、人類学者としてそれを第三者的に見つめ直すという作業がそこに加わることによってより説得的な記述がもたらされている。

また、このミクロな現地調査を行うに当たって、二つの対照的な調査村が選ばれている点が、ネイティブとしての直感を活かしつつも、その思いこみに縛られないようにするうえで有効な工夫になっている。この二つの調査村として、典型的な半牧半農村と、より伝統的な牧畜村が選ばれている。そして、この二つの村の生活のあり方に関わる違いは、農耕化の進展に伴う文化の歴史的変容を理解するうえで、確かな見通しを与えるものになっていると評価できる。

それに対して、マクロな政治経済史を視野に収める歴史的経緯についての研究は、ここでの研究対象であるモンゴル牧畜民が、漢民族の農耕民国家に対峙する形で、その北に広がる乾燥した高原地帯に生活の根拠を構えてきたという事実を無視するのではない限り、どうしても必要となるものだと考えられよう。この研究における焦点のひとつである「生業変化」のもっとも基本的な部分は、この南に広がる農耕民国家からの農耕化の圧力に由来するものだということになる。本研究では、この農耕化への圧力とその変化の実態を、長い歴史的背景と政治経済体制の影響の及ぼし合いに関わる従来の研究を整理しながら、調査村における移住村としての歴史に関わる人々の記憶を繋ぎ合わせてそれと照合すること

によって、一方の当事者であるモンゴル人の対応にもとづいて、生活者がその時期の政治経済的条件に対応して選び取った生き方について考察することが可能になっている。

漢民族の農耕民国家とモンゴル民族との関係に関わる政治経済史的研究という問題に関連して、基本的に被支配層の側にあったモンゴル人による研究では、この「生業変化」という問題について、支配層である漢民族側の強制にもとづくものという民族主義的な理解に収斂する傾向が強いと言われる。それに対して、本研究では、この「生業変化」を、その時代のこの地域に特有の自然的、歴史的、政治経済的条件に適応しようとして、当事者であるモンゴル人たちが選び取った変化として理解しようとしている。それは、人類学の伝統の中に蓄積されてきた「牧畜社会」についての理解を参照することによって、農耕が不可能な、あるいは、不十分にしか行えない乾燥地帯に適応しようとして編み出された生き方の一つのバリエーションとしてこの「生業変化」を考えようとする立場を採用することを意味する。

このような立場を採用することによってはじめて、改革開放後に家畜の個人請負制が実施され、さらに遅れて、すべての放牧地が個人に分配されるに至る時期に進んだ耕作地の拡大について、公平で客観的な判断が可能になっているのだと考えられる。すなわち、それまでの草原の開墾が農耕民国家による政策的介入によってもたらされたもので、多くの場合モンゴル人は草原の耕地化に消極的役割しか果たしてこなかったのに対して、この場合には、現金獲得へと強く動機づけられた牧民の自発的選択によって進められた開墾であったことから、それがもたらす生態的ダメージは非常に深刻なものになったと考えられたのである。

このような改革開放後のさまざまな施策の実行に伴って、中国社会は本格的な市場経済体制下に進み出ることになるが、その時期に、それ以前からあった「生態移民事業」が「西部大開発」という産業振興事業と結びつくことで、内モンゴル地域における生態環境の悪化への対策であるとともに、牧畜の産業化、移住村の計画的配置による小都市化を目指すものという位置づけになって、この事業をめぐる状況はきわめて複雑化している。このような問題に対して、本論文は第二部「市場経済と生態移民」という項目を立てて正面から取り組み、生態的論理という筋を通すことによって、そこにある問題点を適切に把握していると評価できる。

以上の、生業変化とその後の市場経済化への変化のもとで、伝統食や、人名、地名に見るモンゴル語、オボーという民族的祭祀・祭礼という文化現象に起こった変容が、本論文の最後に論じられる。この点については、すでに述べたように、ネイティヴとしての体験に基づいて、その変容の具体相が説得的に描き出されていると評価できる。ただし、ここには無視できない問題点が残っていると考えられる。それらの現象に対して、このような大きな時代的転換期をくぐり抜けることによって大きな変容がもたらされていることは確かだとしながらも、そこにある伝統的な要素は過去のものとして忘れ去られるのではなく、新たな装いのもとで再生しているかのようである、という共通の結論が付与されることに

なっているのである。

この結論は、本論文の第一部「生業変化」における劇的な転換との対比において、どのように理解されることになるのであろうか。本論の基本的論理が、「生業」を基本におく日々の生活が生み出すものとして「文化」があるというものだとして、その「文化」の再生がなぜ可能になっているのだろうか。この生業を基本とする「生業経済」から「市場経済」への転換において何が起こったのかについての検討は、今後の課題として残されたことになる。

以上の点から、審査員全員一致で、本論文を合格と判定した。